



浪仁上久鼓句集



半雪居野鶴輯

浪化上人叢句集

南無庵藏版



浪化上人叢句集
飛鳥如く山嵐園り玉珠多人治人を
待て始て寒衣わたりたるは言のまじし
今こそそのまじし家のまじし少人哉得
世まじし大和の國のまじし短まじし品
中のまじし者磯海乃中まじし

玉を坐するの如く糸を糸めて世に傳えんとや
 ともしてゆく浪化上人の予大為十あり四の
 清門の淳寧院の君は季の傳子なり城の
 中國井波の清國ふましくして法のをく入り
 云のたのけり月花ふれ山のふりてたが飛
 枝折匂の教ありそ海は有珠海を

世の人よ只傳えよう一ををの頃越の人
 野鷲ねく坐るく上人の言の意は味あ
 あつふふ世も遠く都へ来すく坐の首ふ
 ふむもわらわは日紙亦糸月を踏てわき
 座のふふを環人治人なり其を世に
 傳ふは坐るく百人をわきのほの世に人

得くも然り能くを著してしるるなり
上人を居いしくするなり

慶應紀元五七月

大谷坊官下間氏部法眼源頼世誌



意真浪化とて門主一如大信正の所連枝りて越中井波
隆泉寺に傳ひしとて在末の折去未紹介して唯唯哉
林舎りて芭蕉翁の門下なりとて其のより凡物に高きなり
以て此の雄師なりとて元禄十六年十月九日御年三十三
歳に遷化し之を傳ふ之傳之自遺書の教号あり傳の
事なりとて其の光和傳文採りて詳之今上白集を撰録すに
石月集有珠海砂波山玉まがりそこの花
珠有珠海宗の光白扇集雲海し今別の首
板多集白陀羅尼極盗人東西板話泊舟集
全比羅舎北の糸笈日記類塞射水川
旭川梅の牛本朝文繼和傳文採風俗文選

旅 集 喪の余波 三抽拾遺 仇訖反古 柿表決
 菊の道 疏おし交 凡尾無 名不小流 秋歌費句集
 古 選 月令博抄全 去来評句合
 上人自筆日記四卷 同仇訖文章二卷 井波丹今子小英陸平所為
 といふの書ついで抽出されぬと稱といふものなりとせば
 多しとすおのせうんさる書といふはむと書中の句を句集
 所録又てその月の法書と名するをとりて言てそのよ
 りとせばさういふ書とて一部の書とすべしなり

聖鶴識

浪化上人發句集

越中

半雪居野鶴海
 秣 園荻舟校

春之初

春もたれぬく花の初陽の
 粉身もくくくくくくく
 一本をとりくくくくくく
 春の中の花もせぬの口利が
 あらぬのくくくくくくく
 後くくくくくくくくくく

文詞

古文よむ人よ 一日はくは
いふに様ては ありやむの境

海院

うねりやいさ先きく様衣

夕ぞら亡妻をいひむ

あふくも花も泣く二七の

十日を志居る志はけむれを

花をよの古ひわくしつよけり

あふのわり結くさの波は船各千

信くも被境を山岸へ志の俗を

おれれ農者のかたうへはあはれ

かきの桜をやあはらうてまき

あふくも花も泣く二七の

あふのわり結くさの波は船各千

信くも被境を山岸へ志の俗を

おれれ農者のかたうへはあはれ

かきの桜をやあはらうてまき

あふくも花も泣く二七の

あふのわり結くさの波は船各千

信くも被境を山岸へ志の俗を

おれれ農者のかたうへはあはれ

結し何乃風情のまじりてあはれ
 赤南の、原をわたりけりや、日内舞
 こちをわけて、清おこしと、おくりあ
 きの、是も、ちかき、もとの、ちかき、乃
 ち、さし、おこし、おこし、おこし、無
 阿の、事と、おこし、おこし、おこし、
 こ、おこし、おこし、おこし、おこし、
 早の、おこし、おこし、おこし、おこし、
 お、おこし、おこし、おこし、おこし、
 あ、おこし、おこし、おこし、おこし、
 ち、おこし、おこし、おこし、おこし、

ちの、おこし、おこし、おこし、おこし、
 ち、おこし、おこし、おこし、おこし、
 ち、おこし、おこし、おこし、おこし、

餅お舎

餅、お舎、の、目、の、有、明、と、桜、の、家
 あ、は、は、の、根、本、と、は、ん、の、さ、梅

路言歌梅

きの、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 ち、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 山、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 子、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

よみ交ふついでと多しゆりぬる女の心
くぬりまや凡そふぶのささのしゆり

柳菴梅

引るの多るぬや梅の築地陰

菴梅

根之けりや序尻うそてこの梅

初舎 二句

日雪の場とりを庭しぬるの心
初め此れ梅とてぬる日板が
さし丈のさしぬるぬのしゆりぬ
其後のぬるぬをさるしつてき

白梅やそぬぬ雪のうけはる

林お高島乃

お梅乃やうそとりのわりのぬる

お梅の心廣く

くぬりぬるぬ雪のひきぬるぬの心

くぬりぬるぬ雪のひきぬるぬの心

梅の心ぬるぬ雪のひきぬるぬの心

十八の心美尾よかぬるぬの心

高梅をさるぬ

くぬりぬるぬ雪のひきぬるぬの心

山月廿四をさるぬ

南に義付きくきり古翁の願あす
流久丸とせの末とまありそ
あきりしり一かえり大朝和事
化はのちりり今昔吟をうて
その句をよみわたり

梅とひそその梅おむなごころ
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり
かこくそ名を流をちりり

いあらぬやけはる美人かきこあき
せうを来也の書井をけりり
よりそのあきありて許子を先板
より秋高る出あき宿主四人
種無のそ せうお仙の歌
歌あきし流やうそ
踏健子の歌文二平七回忘懐旧
抄おてあきだもあき
え録主申の老十月廿五
を尾るりありしる
清日久梅の花の句
五

多悲控ぢくしきく阿のと昂やき
 仕うへあゆー二月廿五日拜座り
 なるきふぬあけきーあそ漸十
 月廿五日企舎
 折あそと折あそせさうらぬの花
 柳のやまきかふるばーき

初舎

初まのちちつてくく又梅柳

重海多あ

梅は乃柳をあやきーらるぬ
 人こもの中くあささー柳柳

古きあのへ産とらぬま柳うぬ
 へーくあささるる大聖ちけ人のあおて
 如月廿五日とせとそてあさ子
 さうれあささいつこつを柳う子
 葉細や境たりあおりのそ
 福光の柳さされぬ松麻をあさ子
 ころふ

是れあそそ柳まやさるりかうーの門

福具

枝まそくちのついで新や柳柳

萩人多

花々のあつた園のつくし核の子

糸玉あつた

鶺鴒の聲もいさよつとまきうれ
其種もあつたお姫はさまじしをまじ
焚くまじりあるまじりひてまきうれ
いさよつと後にもあつた核の子
糸玉あつたお姫のあつたまき
子まきあつたお姫のあつた
糸玉あつたお姫のあつた
糸玉あつたお姫のあつた
糸玉あつたお姫のあつた
糸玉あつたお姫のあつた
糸玉あつたお姫のあつた

乃満さのまき連年のゆくまき
まきあつたお姫のあつた
まきあつたお姫のあつた

お姫のあつたお姫のあつた
お姫のあつたお姫のあつた
お姫のあつたお姫のあつた

お姫のあつた

お姫のあつたお姫のあつた
お姫のあつたお姫のあつた
お姫のあつたお姫のあつた

々々目と終乃本殿又信てつとあま
 るは神代二月の末ノ様立を
 新玉や鳥見之れをさし入
 越中庄の川原を彈乃山中より出
 舞冬の名方をさしりて陸る家奔等
 乃と一そのおらる雄神の藁祠あり
 庄門と庄の互交ある處之樹と神林
 川をくゞ木葉乃二十四ノ後新玉
 乃さ何り幾多女ありてさとおひて者
 ささる川乃句を採

奥より、葉、夜々の鳴や神神川

陸健子乃姉、おらるを信て
 ぬその身、とのさし、夫の雪
 うはすとのさし、とさし、夫の雪
 うはすとの尾、とさし、夫の雪
 今、継々、娘の道、さし
 この方をとり、おらる、雪、佛
 栗越々、越後、の切、さし、人、の、園、に
 新玉、の、踏、を、と、ゆる、さ、の、息
 今、日、午、の、義、仲、吉、翁、の、様、さ、し、り
 かけ、ろ、あ、や、毒、ま、つ、ぶ、そ、お、さ、し、り
 せ、あ、れ、つ、と、お、ら、る、お、れ、の、口、と、れ

櫛子 昔はしらみん〜表

とちの歌集百々日

夕か鏡や山月さそそめち〜あは
くあ〜さ〜とあ〜り〜る 涙般あ〜る
つ〜か〜し〜る ち〜ん〜ん ち〜ん〜ん

巴今うた文書きしむ

あ〜と〜てあ〜り〜るよあ〜るひれ

室三月

さ〜り〜る故のあ〜るさ〜るさ〜る
夕日〜るや〜ちのさ〜るさ〜るあ〜る
椋鳩のさ〜るさ〜るさ〜るさ〜る

物のとまり 時なり 夫を〜る

ち〜ん〜ん〜んに時なり物乃の櫛子
のさ〜る〜るあ〜るさ〜るさ〜るさ〜る

此〜る〜るあ〜るさ〜るさ〜るさ〜る
目出度き〜るを〜る〜る

茶倍のこはけ〜るさ〜る 櫛田

アラキハリ

夏之詠

静よ白たうらなを 鳴く鳥を
わらうまは山田乃水いふく
わらうまは二都くも一夜田
子初尻平ゆせし 足御く乳
山休乃山を山初くおんを
白雲は山く山青く山ををを
夏之詠とをたのむ山ををを

夏之詠
静よ白たうらなを 鳴く鳥を
わらうまは山田乃水いふく
わらうまは二都くも一夜田
子初尻平ゆせし 足御く乳
山休乃山を山初くおんを
白雲は山く山青く山ををを
夏之詠とをたのむ山ををを

彼境を古よ名変違うくは 國古の
旧屋々を堅固の飛雲よりたつ川お
御廻志めくろ 脚をよふ富のそを 蕙の
海千志に空をよそくは 徳是凡種
きつろよは地をり

高き大古くを雲の影

お杉のせりくむあやむのる

同古廊の感懐

休くもみくぬぬの茂くは
鹿夜する兒もくくく 麦の秋
りと通りおまの 林のよま

種千安くを夏をつくろお田まをれ

海の方山を看して

新まを多そぬてたお入る子
夏くくく 藤方咲くおくく 即興
ふやれおろし 雲を過侍おとよ
半ひらくをくももわろ ちのの
燕子花咲や日照り ちのの
あくく 丸のの 咲くろ ちのの
柳千 夏くく 花をわ 媒き 鳴

全匙留法神の歌

きんすりと古城おる して松の歌

夢の如

夏をゆく一とよむと新橋が
桜吹雪とて一線とて松
卯月十八日水菜子とて一とよむと
日流すを風物乃友を逢ふて自
遣わす懐しの情をよむ
ふの桜とて一好む。わさくれ
わさくれの休の子とて一山家が
休の子とて一あきつるあゆ厚
うらぬふりやわさくれの月夜が
ゆむとて一休とて一とよむとて一

白砂や志のつとて一とよむとて一
白雲の羽をうとて一とよむとて一
うらぬふりやわさくれの月夜が
ゆむとて一休とて一とよむとて一
その時とて一とよむとて一
夕や半時の一とよむとて一
赤花村の母乃一とよむとて一
水菜子の末とて一とよむとて一
とて一とよむとて一
とて一とよむとて一

藤人乃あまのうらみ所のまゝわら
わぬとあそびの物も 甲子の子
信也のまゝの心ゆるお月を
お月をうてまはるるお月を
みよ物をあまのうらみま
いふまゝに信也のまゝ
あまのうらみまゝのまゝ
あまのうらみまゝのまゝ
あまのうらみまゝのまゝ

端々

亥亥とていふをうらみ甲子子

ほまち端々いふをみよ
山阿の舟橋ありてあまの
こゝの故郷のまゝのまゝ
お月の中は和久のまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝ
お月の中は和久のまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

たをきりし庭の志のなる戸たれ

山家志文追時

目もえりてをきりてあつては
松の本れあもひやをふ山の元
為林のさむひをさるし麻洗巾
坐りてさるふふり

高き

汗水さりてをきりてあつては
稀立人をさるぬまを送るて
われ惜や川のさるて静きさみ
ねをさるあつてさるぬまを送る

高き

その静や川とあふ葉のすくくは
あつてあつてさるぬまを送る
の静や川とあふ葉のすくくは
葉の静のあつてさるぬまを送る

秋之秋

去路をたすむ 打つる やぐらの月
名月や水鏡を遊ばせる 秋の節
名月や魚のこころ 水の色
名月やおもひをまきのなるを教
名月の影をたのまきや 夢の色
名月や 秋の意を 中知り
名月や ささく 秋の傍を

金澤は松坊のきき 松内をおめりて
名月を 玉衣をさりの 唯子くれ
名月や 秋の意を 遊ばせる 秋の色
名月を 徳をさる 秋の色
名月を 料をさる 秋の色

浄蓮社結の道

名月を 木花の 出する 秋の色

祝の形

名月を 七々の 月の 祝の色
名月や おもひを 秋の色
名月や 秋の中を 秋の色

八月十七日 安房寺の詣り 疎く
大寺の名を愛をにおよ

とあ月をまきまきとあきり 杖のり
名月と保の浄蓮社を面海をれを
舞きしてまありめあたり寺の月
かし舟や月をまきまきとあきり
才山をまきまき越社の海をんを文月
十百井波をまきまきとあきり
月をゆけ有疎の小貝原吳やり

高岡子院

養子院とまきまきとあきり

あきまきとあきまきとあきり
八羽の帯をまきまきとあきり
於糸の帯やあきまきとあきり
山波 茶をまきまきとあきり
咲枯枝

病中

あきまきとあきまきとあきり
萩の戸をまきまきとあきり
之月十羽此風涼く言をあきり
赤糸材をまきまきとあきり
疎で満ちあきまきとあきり
は先をまきまきとあきり

とせ成箱高國のし折と志しんや
あひまひしをむまきけり人そし
ま稲のまひや有様めくりの杖のあひ
お付のま稲と芥とま稲田が
稲折る道はの國のひらさぬ
計書の末はとまき一をすお
る人の眼を細くすおおが
言志階法ちのあひりや
待取のゆるくや 野のし何極
は風をそめてまそけのらさひ
志のま子宙にけりのまあうれ

お檀の源をうきりうきりの花

山行

山水千葉の花のこころひうき
苗まうしほ世をまひや山はうき
まわくと稲うきひんうき菊の中
まおをまわつままとまあ九日くれ
まあひりけ八百の白の序あひり

病後

取しあふ葉のつるまの庭のり
まら

深夏の志向し祝ふ終るれ

皆引菓の味を菓の二むひか
 菓草を甲そろりて黄なる持
 之を味と喚ふれせぬ九は子
 菓の十の味を又 揚子のあそひ
 あし まうけせし地のしりこ
 あしそに松梅桜をと翫うふれに
 たるおしあれはの菓の味をのり
 人数りこるひをわきよくあ
 菓の味は凡地をさすよ教書
 凡地をの 有やそ 菓の味 丸

菓の

友方へ多拜く 菓のわらわ
 多き一菓をさそはるせし
 親又とわらぬめそ 一菓の味

伏木汁浦

杉のや疎山うけを菓の味
 けりや言ふは菓の味を
 へそめし菓の味を
 と多くの菓をさす平らなる
 その味をうけは菓の味
 又かろ言ふは菓の味
 元なり口を方して菓の味

毒むして定めてしめたるやうに
信者たる風氣をせしめり又信協を
形も一重協ありて二重おあまひ
美の志の云ふ協えの節を信者
者すと云傳ふりいふ協ありやめ
をしんぬ

信協平一耳あそびのしんぬ
夕陽のしんぬを信者しんぬ
節のしんぬしんぬしんぬ

高岡のありしんぬ

信者しんぬのしんぬ

信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ

信者しんぬのしんぬ

信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ
信者しんぬのしんぬ

水玉の鱗を志るや 湯のいろ
そわ〜〜〜つわわ地のは
七夕お萩さ

かきふしのあま〜〜と天の川
あのか〜〜と〜〜のそま〜
逢坂のあま〜〜や星の〜〜

同後終二句

さ〜〜の志あ〜〜のあま〜
さあ〜〜や光〜〜〜〜のけ

表両首

一僕を〜〜の川

池まき

七夕お大〜〜物〜〜の
あ〜〜や尾〜〜の松を搦ね
一〜〜の血敷す〜〜あ〜
林〜〜や福〜〜の〜〜のさ〜
あ〜〜と〜〜や〜〜の鼓
〜〜の林〜〜の〜
〜〜と山〜〜の〜
稲妻や手〜〜の〜

懐外園

い〜〜を投〜〜

冬令

林をまじり切つて風の四島の海へ

懐舟を

さしをけしきのあそびは海死後のもつとを
願ふは後て蕙つのをわくまをるひしを
くそそあそびのあそびは人あつた

そのまじりそのまじり林の橋おぬれ
懐舟つりこもる女は長き

驪山未悔因襲如

月一りともあそびぬあそびは
痛くあそびぬあそびぬあそびぬ

人丸淡

くらくらくその影を揚ぐ草のつや
多きまじりゆわくやを揚ぐま
糸筆をみれ物曳のあそびつり
板をそそりくまはあそび

依木の浦を空吳の入りつておそあそび
有縁の浪ちり此をよりしんて何れ海を
あそび先はれ子孫のあそびを
林の風有縁へまはるあそび
林の風吹ぬく舟の世帯
り初まじりあそび

新編 松原の松原の松原の松原

少元よりて 松原の松原の松原の松原
丸あふよ 松原の松原の松原の松原
松原の松原の松原の松原の松原

松原の松原

松原の松原の松原の松原の松原

松原の松原の松原の松原の松原

松原の松原の松原の松原の松原

松原の松原の松原の松原の松原

松原の松原の松原の松原の松原

松原の松原の松原の松原の松原

松原の松原の松原の松原の松原
松原の松原の松原の松原の松原

冬三歌

秋の雪 晴て 穀本の光る子
西行も雪の降ぬを 米飯が
あつるの雪のくもや 本この節
有ゆと雪のつく 雪の晴さう歌
大い雪や 降ぬ起る 叶あはせ
の光る母はひしよ 尾の終焉
入の光るや 雪の音日歌

夕子雅俗々三回忌懐旧

有一雪の終末を 雪を お通し
雪をよの引のふ 際を あれれ
終やうん 暮を 嘆たり 終一とれ
吾うけのるも 叶や 終一とれ

福中一 二石

秋の雪も 心者のあし 終一とれ
と 終も 終凡も 叶や 叶自れ
有ゆや 一とれ 終も 終一とれ
雪をよの引のふ 際を あれれ
終やうん 暮を 嘆たり 終一とれ

芭蕉翁追悼

一 家一 家一 家一 家一 家一 家一 家一 家一 家一 家一

日一 周忌

おれおれおれの機嫌のいれれれ

とせ成 翁忌 三

百々 塙の 依する 一 一 一 一 一

かこさる 後を 壁の 一 一 一 一 一

いしおれを 一 一 一 一 一 佛の 一 一 一

法行 孫や 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

おれおれの 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

松林 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

海の中 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

とせ成 翁忌 三

おれおれの 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

口切 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

本一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

極東 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

甲一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

神一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

信一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

孫一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

佛名 一 一 一 一 一 翁の 一 一 一

茶の香や雪のみの吟をうひ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ

茶の香乃鼓

茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ

茶の香乃鼓をたしりふ

茶の香乃鼓

茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ
茶の香乃鼓をたしりふ

雪あふすやうきやうききふ
のすすの目より 長絶えれ
野よりよりまけりまきと大捕り
地や 陸よりよりまきと大捕り
夕 能多新巻

梅とりてきしむあつやおけ
集りて、梅もさひやきさひの
飯をさし、菊のあふくをの月
けし梅のあつてふなやさひの
さる月の入るまきと大捕り
まき野のえと梅りてははまき

ききふやうききふ

このまきと大捕り

も井りてききふのまきと大捕り
けしとるん原のえとやうき
ふ積のまきと大捕り
ゆきとや梅りてははまき

浪化上人文之部

司晨樓記

市ノ付松の力を以て蒼天の下の是れ仰
凡諸の徒はつゞよるはふ常の酒を以ては
梅ののちを以て酒を以ては梅ののちを以て
川を以ては古事とては梅ののちを以て
松のさびさあつては梅ののちを以て
は梅ののちを以ては梅ののちを以て
あゝの梅ののちを以ては梅ののちを以て
衆生の心を以ては梅ののちを以て

夢のぬゝあそびなりとて常を以ては梅ののちを以て
凡諸の人の心を以ては梅ののちを以て
河を以ては梅ののちを以ては梅ののちを以て
を以ては梅ののちを以ては梅ののちを以て
あり磯波山ののちを以ては梅ののちを以て
は梅ののちを以ては梅ののちを以て
色は梅ののちを以ては梅ののちを以て
仰然とて人の心を以ては梅ののちを以て
むとては梅ののちを以ては梅ののちを以て
は梅ののちを以ては梅ののちを以て
月のためは梅ののちを以ては梅ののちを以て

激而奔木自尔矣門下流長河之急流最山川之秀
不經也此亦寺之聚觀也日文以新禽作鏡振花
鏡上聖德是純情之精微得獨之被吹也誰舍此幽趣
乎且乃茲之川岸上之乃後得地免草其加乃紀輯而
為一舟尤乎好白然非其微情真哀之託意安于幸
乃者後於之錄也周後此之夏元錄歲有驪園赤
奮若三月哉生魄之日絲筆於自遣堂之燈云

休山人書

續有緣海部

云何の大袖をききやむゆゆの谷よこもろそいんたるあひ

をのりー 初屋部御系をいふて産人の無ある
情和國を於てあつる文人系仙の御系を系め終ひ
るそそその和を朝御各と云ふもやまあふま情
をそそそ和和と云ふく崇一上れを故芭蕉家と
おのゆえわさとも 彼島の秋まのまのりやまを海
ゆとゆとる去来り情うたうと身とてめてそそ和
の及系撰えんとあひるやうに代々の系う倣はんを
撰とゆふもあつるうと意の徒と名をやう國
とあつるくあつるそそりされとてゆとそそ和を
ゆとそそのすくあ 伊陽の家の家園系武をゆ縁の
地より流南やとあつるそそ和命を休めそそゆり

二をふのりかふりそせきあり

治健

惟のちをこし新しきまあり

林お

さしほや井はふかけるそきあり

支考

新築を意をえ探文

あつと甚意有し西乃馬のりありて久日とる深泉坊
乃月りそてふ意本をのりて意の入る凡のきりそ存の友
まのいありてこしゆりかおお夕をうまう茶若阿り
浄蓮社をりりし浄水のつをを他人の所念併たし勝之
を和と人ありてまうん橋本がし遠く志をも保をはな
りしとあれを竹炭水海わてけ茶坊のう境をゆるり日次

凡社のまはほりて今そ月日の難延相ありて
ちよてけ寺と意の換意を築むるをこりやお侍
林お子やあやうれ志を抽て意をその基地をえりて
つと土石を意ひて方と尺の一をを評定す中を換件
ち故意の研意のふ石と序を収む枝ゆ樹石とれその計あり
しといふんやとれそのすし塚の石より何そ意をうむ
志をれ意のけしりありてとれも己まけ意の意を慕む
世よりいふりし塚の意の凡社の意を誠を求むしお志也
け塚よりし後そとの世の換意をうむるそ意の意の意を
お志の意のれと故意肉塚も也意は少の厚意をいりて
意を意をえりて速く換意をいしき意を評定す中を収む意

ははる文も海うらまゝものよれを伴ふ石中の地とあり
元解る事と知り

本文

ちり込保と好むの志二三子ありては二家仙と携り来り
の箱櫃より語して入りナニの玉袋とてしりしは
道徳の一合と信じてしは昔の箱とてしりし鐘表の
情たえ入てしを織し望塚のぬき由のしりし
されしはぬの想ちりきりしはぬのぬのけの水
はしりしはぬの想ちりきりしはぬのぬのけの水

まゝのあも一杖はゆきののちり
あつたしりしはぬの想ちりきりしはぬのぬのけの水
あつたしりしはぬの想ちりきりしはぬのぬのけの水
あつたしりしはぬの想ちりきりしはぬのぬのけの水

かみのぬきは世を認まらう

名山切し説

ぬきは足らぬ性のうらまゝを削て山力にて瓜
の皮をむくぬきは世を認まらう
ぬきは足らぬ性のうらまゝを削て山力にて瓜
の皮をむくぬきは世を認まらう

洛東 南無庵藏梓



九

